随想　責任を取らない、ということ

～あいまいな日本の責任感～

加藤　宏光

六月十三日、農場巡回の途中に、車の中で国会中継を聞いた。自民党の山本一太議員が野田総理に対して、《史上最高、最強の内閣と自賛した内閣を国会最中に五人も交代させたのはなぜか？》という骨子で、田中前防衛大臣、鹿野前農林大臣、小川前法務大臣等を更迭した理由を問い質していた。更迭について野田総理大臣は『それぞれの前大臣は任期中、しっかりとした任務を果たしたが、より良い内閣を目指して、総合的に判断して新しい大臣を任命した』と繰り返すのみであった。

山本議員は質問を終えるに当たって、『無責任な答弁に対して問責提案をする』と結んだ。それぞれの前大臣が任期中に引き起こした問題は記憶に新しい。さりとて、更迭の理由を明確に答弁すれば、任命責任を問われ、総理自身の問責に話が及ぶことは、素人の著者にもわかるストーリーである。それゆえにあいまいに逃げるしかないのであろう。こうしたやりとりを見聞するにつけ、政治にかかわっていないわが身の幸せを実感する。

この質疑を聞くうちに、日本の特性としての、あいまいな責任意識という話を思い出した。『養老孟司の〈逆さメガネ〉―現代人はなぜ〝利口なバカ〟になったのか／ＰＨＰ新書』という本がある。脳科学者としてよく知られている氏はその中で《東大紛争問題》を例にとって次のように記述している。

―抄訳―

紛争の原因は病室近くで医学部学生がマイクを持って騒いだことに端を発している。医学部は、《将来医者にならねばならない学生が（こういった騒動をおこすとは）なんだ。自覚が足りない》ということで一三人を処分した。しかし、処分を受けた一三人の中に、現場にいなかった学生が含まれていたのである。処分を受けるとがのない学生が処分を受けたことに抗議することが、その後、社会を巻き込んだ大きな騒動へ発展した。

この紛争に懲りて、東大はそれ以降、学生処分の規則を決めていない。問題が生じた場合、個々に集団の掟（※不文律）に従って内部処理され、詳細な情報が表に出ない。こうした社会構造は、いかにも村社会ではないか。こうした村社会で教育された学生が、エリート社会人として社会をリードする立場に回る。村の不文律で処理される環境下で法律を作り、それを守ることを司る人が法学部から社会に排出されるのである。

だから、憲法九条で戦争放棄をうたいながら自衛隊があり…なのだ。そうした国で、首相はアメリカの武力行使を支持し、イージス艦を派遣する。戦争になれば《村の掟》で処理するに違いない。その《村の掟》は明

文化されていない。しかし、（※時の権力者が）必要となれば突然（※村の掟に従って）、『××何名除名』となる。怖いじゃないですか。（※著者註）

―以上引用―

責任を取らない社会という話は、著者の高校時代の化学の教師も強調していた。ドイツは戦争を総括し、国民の責任を自ら認めたのちに、軍隊を持つべきか否かを国民全体で討議し、その結論に従って軍隊を保持、NATOメンバーにも加わってきた、というのである。

二五年も前のこと、大型採卵養鶏経営者と総勢三人でローマン社を訪問した際に、名だたるオートバーンを、NATO軍の一員としてのドイツ陸軍が、戦車や装甲車を主体として、われわれの進行と逆方向に一路邁進している光景に遭遇した。最初の車両から、その最後尾を過ぎるまで一五分以上を要した。時速一三〇キロメートルものスピードで走り二〇分とすれば、延々三〇キロメートル以上もの行軍列である。同じく第二次大戦で敗戦を経験したわが日本では、当時はとても考えられない光景であり、われわれ三人は口々に『日本では考えられない光景だ…』と騒いだものであった。

時が過ぎ、東京から福島までの東北自動車道を走ると、自衛隊の隊列を追い越すことが少なくない。長いものでは全体を追い越すのに四〇～五〇分を要する。先の事例は対向であり、追い越す場合とは事情を異にするものの、二〇～二五キロメートルの隊列となろう。戦車がダイレクトに高速道路を疾走することはない（大型トラックにカバーをかけられて運ばれているようである）が、一昨日の隊列では高射砲を引くトレーラが一〇台以上続いていた。

著者は軍の必要性を否定しない。大学生を含む若い頃から、むしろきちんとした形で軍を備えないわが国のありように不思議を感じていた。四五年前には《自衛隊は軍ではない、あるいはその存在は悪である》とした建前で、友人の自衛隊員は『街で喧嘩もできない』と打ち明けた。二五年の前には、自衛隊軍が高速道路を走るのにこれほど大っぴらでなかった。それが、災害救済等の活躍で存在の場を認められ、徐々に活動を表面化しているように感じられる。

軍が活動するのは国際紛争の多いこの頃、必須となるであろう。その前提をしっかり公示し、情報を開示し、そして国（民）全体で納得した時点でこうした流れを取るべきであろう。

著者は満州で生を受け、外地育ちの両親に《人としての責任》を強調されて育てられた。それゆえに、責任を回避するために筋道や議論をあいまいにする会議には辟易する。しかし、凛とした姿勢が、この国では時に生きていくには有利でない、という事実にもしばしば遭遇してきた。その場の責任を逃れても、最終的にはいずれかの過程で責任を取らされるはずで、それがかえって大きなものになるような気がしてならない。